

2日間で 東北4県かけある記

きっかけ・動機

パナマへの「感謝の旅」から約4年。コロナ禍でほぼ3年あまり、海外はもともと無理として国内もどこへも旅行に出ていない。そんななか国内のコロナ感染者数も減少傾向にあった10月に入って観光業を支援する政府のいろんな施策が打ち出された。その一つがホテルや乗り物の割引。新聞にも毎日のようにページ全面に旅行社の広告が出始めたなかにJTB企画による「東北絶景ハイライト2日間」があった。



中尊寺、角館、奥入瀬、十和田湖、初荷峠を2日間で回るというものである。

往復を東北新幹線「やまびこ」を使い宮城県の仙台から岩手県、秋田県、青森県の4県を大型バスで回る1泊2日の“超特急”の旅である。中尊寺はこれまでに2回訪れていたが、後の述べる是非一度は訪ねたい奥入瀬がコースに入っていたので妻と一緒に参加することにした。

予約日が早かったので残念ながら「割引」は適用されなかったが、それでもかなりの割安料金になっていてコロナもほぼ大丈夫そうだったので久しぶりの旅を決行！

出発日・第一の訪問地まで



(写真はネットから)

1泊2日で4県を回る——超濃密というか超ダッシュのスケジュールとなった。

11月3日(文化の日)東京駅発7時12分の「やまびこ123号」に間に合わせるために4時に起き5時21分昭島発の青梅線から中央線の電車に乗り東京駅に駆けつけた。添乗員の案内によると参加者が予想外に増えて上野、大宮で乗車する人を含

めて38人だという。大半が女性で男性は自分のような定年後の高齢者の10人ほどだった。

9時18分仙台着。速い！テレビでよく見るグリーン色の鼻の長い新幹線特急で2時間ちょっと。現役時代に仕事で仙台に在来線の特急で行ったときは3時間以上かかっていた、さらに半世紀前に東北地方からの集団就職の夜行列車がこの倍以上の時間をかけて上野に到着した時代を振り返ると、この東北新幹線は北日本と首都圏をグッと近く結びつけたようだ。

仙台では出迎えのガイドに誘導されて50人乗りの大型観光バスに乗り込んだ。当初、2人掛けの座席に1人、と聞いていたが、座席は全てがその通りにはならなかった。こんな事情ではやむを得ないか。バスは一路、岩手県の中尊寺へと向かった。

紅葉に覆われた中尊寺境内

中尊寺（ちゅうそんじ）は、岩手県西磐井郡平泉町にある天台宗東北大本山の寺院。本尊は釈迦如来。実質的な開基は藤原清衡。奥州藤原氏三代ゆかりの寺として著名であり、平安時代の美術、工芸、建築の粋を集めた金色堂を初め、多くの文化財を有する。金色堂の入場料は 800 円。その名の通り本堂内はほぼすべてが金箔で覆われていて、極楽浄土を表しているとのことだった。金色堂内では写真の撮影が禁止されていて 数分ごとに仏像などの説明案内のテープが流されていた。



境内には本堂、金色堂旧覆堂、経蔵などいくつもの坊がある。境内の坂道 向こうが金色堂



を少し上がったところには松尾芭蕉が江戸からここまで行脚してきた像と詠まれた有名な俳句が刻まれていた。

「五月雨の降りのこしてや光堂」

高校時代の国語の教科書に載っていた「奥の細道」の文中で学んだ思い出がある。

下り坂が続く帰りの歩行路の頭上には真っ赤に紅葉したモミジと歴史を写す杉林が境内に晩秋の趣をかもし出していた。

角館の武家屋敷を訪ねる

中尊寺を下山したところですぐ近くの土産物店兼レストランの会場で昼食。事前予約の前沢牛のスキヤキ膳を食べ終わるとすぐにバスで角館に向かった。あいにく小雨が降りはじめた。念のために折りたたみ笠を持参していたのが役に立った。

角館は黒壁に囲まれた趣のある武家屋敷が多くあることで知られている。見学案内の人力車のお兄さんも寒そうに顧客を待っていた。街路には真っ赤に色づいたモミジが垂れ下がり小雨と合せて風情を一層深めていた。



山の中にある洗練されたホテル

初日の見学地は中尊寺と角館のみで大型バスは暗くなりかけた道路を一路ホテルへと走った。岩手県の山中にある雫石（しずくいし）プリンスホテル。10月末から一斉に旅行客が動き出したようで、すでに3台の大型バスの観光客が到着していてホテル内は賑やかだった。

夕食は大広間でのバイキング。旅行はOKになってもコロナは終息したわけではない。受付では手の消毒はもちろん、食べる時以外はマスクの着用。ボールや大皿に盛られた料理を自分の好みに合わせて小皿に盛るときに使う透明の薄い手袋の使用義務。アクリルによるテーブル間の仕切り等々、感染予防に留意しているのがよく伝わってきた。

ところで旅行者の最大の楽しみの一つである温泉なのだが、浴場の洗い場と比較的大きな露天風呂のみでこのホテルの建物内には風呂（浴槽）はなかった。晩秋の夜の寒さで外気は結構冷えていた。それでも露天風呂の周囲のモミジや他の木々の色づいた葉が



ライトに照らされて絶妙な情景を生み出していて観賞に十分に堪えられる美しさだった。

翌朝の朝食の際にはホールの大きな窓ガラスの向こうには雪をかぶった岩手山が迫ってくるようだった。ホールの支配人に尋ねると夜の間に降った新雪だという。どうりで昨夜の露天風呂は外気がとりわけ冷たかったわけだ。

念願だった奥入瀬を歩く、でも少しだけ



2日目の最初の訪問地は奥入瀬（おいらせ）。二重カルデラ湖の十和田湖が決壊して形成されたU字型の渓谷である。溪流沿いには国道が走り、それに沿って自然遊歩道も整備されており、新緑や紅葉の時期は多くの観光客で賑わう。ベテランの運転手は大型バスで狭い曲がりくねった道路を巧みなハンドルさばきで進んでいった。上流域は、遡上する魚が十和田湖までたどり着けないことから「魚止めの滝」の別名がある銚子大滝（高さ7m、幅20m）や落差15mの九段の滝など、支流を合せて20ほどの滝が連続して現れるため「瀑布街道」とも呼ばれている。下流域は川幅が広くなり川べりにはブナやトチノキの森が広がっていた。川に沿った遊歩道を短時間だけ全員で歩いた。温度は低く途中から霰（あられ）が降ったりもしてさすがに寒かった。

なぜ一度は奥入瀬を訪ねたいと思っていた理由は、もう20年以上も前にSGI会長の池田先生が壮年部に「滝の歌」を贈られていたから。当時は皆で練習し壮年部員の集いではよく歌われていた。「滝の歌」の書かれた色紙をいただいていた経過もあったからだった。

滝の如く 激しく	男は
滝の如く たゆまず	王者の風格を持つ
滝の如く 恐れず	
滝の如く 朗らかに	昭和46年6月
滝の如く 堂々と	青森・奥入瀬にて 大作（署名と捺印）

念願だった奥入瀬を訪れることが出来て「この歌の通りに進みたい」と決意を新たにした

（滝の近くに行く時間とチャンスはなかったので残念ながら滝そのものの写真はありません）

十和田湖とヒメマスのお話

十和田湖（とわだこ）は、青森県十和田市と秋田県鹿角郡小坂町にまたがる湖。日本の湖沼としては、最大水深は 326.8m で第 3 位、面積では 12 番目。東岸には奥入瀬川があり、北東に約 14km にわたり奥入瀬溪流が延びていて、約 20km 北には八甲田山が位置している。

当初、遊覧船に乗るのかな、と期待もしていたが往復のバス内からの見学のみだった（もともと予定にはなかった）。バスガイドはこの湖にヒメマスを育て増やすことに長年取り組んできた人物の感動的な話しを紹介した。どこの世界でも最初に何か新しい物を生み出す人には不屈の信念と努力が求められるものだ、ということがあらためて実感された。

1 泊 2 日は実質的に 2 泊 3 日に相当？

十和田湖の見学を終わるとバスは東北新幹線の一ノ関駅へと走った。時速 120 キロを超えるスピードのようだが車体が大きいので安定している。一ノ関からは 19 時 22 分発の「やまびこ 70 号」で東京に向かった。ピタリ 22 時東京到着。そこから中央線、青梅線で昭島の自宅に着いたのはちょうど夜の 12 時だった。



（十和田湖の写真は小雨で撮れずネットから）

振り返ってみるに、1 泊 2 日で東北 4 県の主要観光地を巡る旅は 2 泊 3 日にも相当するかもしれない。年寄り夫婦には少々きつい日程で忙しかったがそれなりに充実した旅となった。